鹿児島大学歯学部開設30周年を迎えて

副学部長　椙　山　加　綱

鹿児島大学歯学部が開設されてから30年が経過した。人生に喩えれば30歳になったわけである。鹿児島大学歯学部は昭和52年に口腔生理学と歯科理工学の２講座で発足した。昭和53年の３月に第１回目の入学試験が実施され４月に入学式が行われた。同年歯科保存学第一講座，口腔外科学第一講座，歯科矯正学講座の３講座が設置され計５講座となった。歯学部が誕生してから６か月目のことである。翌年には口腔解剖学第１講座，口腔生化学講座，口腔病理学講座，予防歯科学講座，歯科放射線学講座が設置されて計10講座となった。昭和55年には新しく竣工した歯学部附属病院において診療が始まった。当初は予防歯科，第１保存科，第２保存科，第１補綴科，第１口腔外科，矯正科，歯科放射線科の７診療科であった。歯学部は満３歳になった。同年口腔解剖学第２講座，口腔細菌学講座，歯科薬理学講座，歯科保存学第２講座，歯科補綴学第１講座の５講座が加わり，昭和56年には歯科補綴学第２講座，口腔外科学第２講座，翌年には小児歯科学講座が設置されて，当初の予定であった18講座すべてが整備された。附属病院では第２補綴科，第２口腔外科，翌年に小児歯科が設置されて10診療科となった。この年歯学部は５歳になった。平成４年に歯科麻酔科が設置され，診療科数は11となった。歯学部15歳の春であった。平成９年，歯学部が20歳の成人式を迎えた年に歯科基礎科学講座が設置された。すなわち，20歳にして19講座と11診療科全てが揃ったわけである。そして，平成15年に大学院医歯学総合研究科が設置され，10月の歯学部26歳の誕生日に医学部と歯学部の附属病院が統合されて医学部・歯学部附属病院となった。今，鹿児島大学歯学部は開設30周年を迎え，年齢は30歳になった。30歳と言えば，大学を卒業して歯科医師臨床研修を終えて大学院に入学し博士号を取得して大学院を修了する年である。もっとも浪人や留年を経験していれば，多少のズレは生じるが…。

この間，鹿児島大学歯学部はいろいろな分野で数多くの改革を計画し実行に移してきた。学生教育においても例外ではない。教養部が解体し共通教育が実施され，それに伴い教育カリキュラムも改訂された。仮進制度という学生救済処置がなされた時代もあった。そのような教育改革の中でも共用試験の実施は特筆すべき出来事である。共用試験は歯学教育の改善と充実をめざして平成14年に開始され，準備のためのトライアルを経て，平成17年から正式実施された。共用試験には CBT（Computer Based Testing）と OSCE（Objective Structured Clinical Examination）がある。CBT は臨床実習の前に，それまでに得た知識の総合的な理解力をコンピュータで評価する試験である。OSCE は臨床実習に必要な基本的な診療技能や態度を評価する客観的な臨床試験である。どうして CBT や OSCE が必要になったのか。我々の時代は専門科目に合格すれば臨床実習が始まり患者さんの配当を受けて診療を行った。しかし，机上の筆記試験では合格点を取る学生でも患者さんの前に立つと思うように診療ができないという事態が生じた。たとえば，抜歯に使う器具の名前はよく知っているが，実際の器具を見たことも触ったこともないという学生が患者さんに抜歯をするという事態が生じた。患者さんに対する問診の仕方や接遇の方法も知らない学生が患者さんと向かい合うことに疑問が投げかけられた。以前は多少の失礼も許されたかもしれない。患者さんもその辺はよくわかってくれた。私も臨床実習で患者さんの真っ白なブラウスにチオコールラバー印象材を付けてしまったことがあったが，患者さんは笑って許してくれた。しかし，今は時代が違う。社会が変わったのだ。このような歯科医療を取り巻く社会情勢の変化を敏感に感じ取り，教育システムを改善していかなければならない時代になったのであ

る。そのためには実際の診療を行う前に十分な知識と技術を修得したか否かを判断しなければならない。当然，不十分な学生は臨床実習に進むことはできない。患者さんにとっては素晴らしいことである。これを全国規模で行う。これが共用試験である。共用試験の実施により我々はさらに多忙になった。しかし，共用試験の意義を理解すれば納得できる。いや，納得せざるを得ない。

共用試験を例に挙げて説明したが，このような歯科医療を取り巻く社会情勢の変化，多様化する社会のニーズに応えられる大学が，いま求められている。教育だけではない，研究も臨床もそうである。昭和52年に産声を上げた鹿児島大学歯学部は30周年を迎えた。人生で喩えれば30歳になった。さあ，これからが重要である。さらなる発展と躍進を遂げるためには執行部を中心に教職員も学生も一丸となって，より一層努力していかなければならない。